

マレーシアに来て18週目、今週で春学期最後の期末試験が終わり、春休みの期間に入った。生徒達も漸く重い肩の荷が下りて、春休みに何をしてお過ごし楽しそうに話していた。マレーシアでは家族を重んじるようで、長期休みの際は多くの生徒は実家に帰るのが常らしい。

こちらの期末試験はまるで日本のセンター試験のように、随分と厳格な雰囲気であった。大学の中でも特に広い講堂に机が整然と並べられ、生徒は決められた番号で机に座り、講師の監視の下、一斉に試験を開始する。当然のことながら筆記用具と身分証明書以外の会場への持ち込みは禁じられている。この環境下での不正は行い難いだろう。正直授業中の中間テストなどは大分監視も緩く、生徒間で話し合う（試験中に）などという事も見られたが、少なくとも期末試験においてはそういった事は無いようだ。

驚いたことに、マレーシアでは試験におけるカンニングはとてもありふれたことらしい。例えば、毎年大学入試を決める試験（こちらのセンター試験のようなもの）があるのだが、そこで毎年必ず不正をする者が出る。直前の問題をどこからか入手し、カンペを用意してくるのだ。その問題はテスト前日には試験を受ける者の間に流出し、事実前日にメールで回ってきたテストの内容が本番にそのまま出題されたという経験をした友人もいる。不正が発覚した場合、当事者は当然試験失格、その年は受験資格を失うという罰を受ける。その事は広く周知されているにも関わらず、なお毎年不正者が出ている。彼らが不正をする理由は単純に勉学に励むのが面倒くさい、より良い大学に入って親の期待に応えたいなど、理由としては単純だ。日本でも不正が全くないとは言えないだろうが、マレーシアほど顕著ではないように感じる。問題はそもそも試験問題を流出させてしまう管理状況の甘さにあるだろうが、それを除いて考えるとマレーシアでは既に不正が恒常化しており、生徒の中で不正に対する忌避感が薄れてしまっているというのが一因として挙げられるだろう。まして知り合いに成功者が居るとすれば、リスクを冒してでも試す価値はありと思う生徒が出てきてしまう事も分かるかもしれない。

MJITやマラヤ大学などで期末試験の監視体制が厳格化している理由は、その当たりにあるのだろうと思う。不正は本人のみならず大学の信用をも落としてしまう為、大学としてもより一層力を入れ、不正の撲滅に力を注いでいこう。私個人としても、マレーシア人全体の信用を失わないよう、試験の監視体制がよりマレーシア全体で強化されていく事を願う。



期末試験の様子。センター試験を思い出した。

話は変わるが、本日より帰国日までの残り一か月、東マレーシアのサバ州にあるコタキナバルという土地に住むことになった。周囲を自然に囲まれた非常に景色のきれいな土地である。他の生徒同様、私の住んでいたホステルのルームメイトも春休みは実家に帰省するので、頼み込んで彼の実家に住まわせてもらえることになったのだ。サバ州のある東マレーシアではKLのある半島マレーシアと人種の割合も異なり、それに伴って文化や風習が大分異なるらしい。帰国まで、新たな土地で新しい経験を積んでいきたい。小倉